CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

〈資　　料〉

古典期アテナイにおける都市国家と宗教[1)]

ジャクリーヌ・ド・ロミイ
白石　正樹　訳

目　次

はじめに
一　市民的生活と宗教
二　民主制の支えとしての宗教
三　政争の武器としての宗教
結　び

はじめに

紀元前五世紀のアテナイは、もしひとが秘儀宗教というあの例外を別にすれば、宗教的なものと政治的なものの驚くべき相互浸透によって特徴づけられる。宗教は実際上、教義も聖職者ももたないというあの独創性を呈している。逆に、民主制のあらゆる活動は、宗教的儀式の刻印を残していた。

二つの領域の間のそうした符合は幾つかの利点をもっていた。── それは、民主制がそのうえに基礎づけられている市民的な価値や義務の体系を強化した（宣誓の役割に対して、法律と神々との関係に対して、また「不文の法律」に対してすら、そうである）。その反対に、涜神に対する訴訟は、どのようにして政治的敵対がかかる混合物を濫用しえたか（そして、人民の信仰の古い根底に作用しえたか）を示している。ソクラテス訴訟の考察は、その危険を測るのに役立つが、またその範囲の限度を越えないのに役立つ。

ギリシア人は国家と諸宗教の関係の問題について、まったく特権的な例、しかも考察に値する例を提供しているように私には思われる。前五世紀のアテナ

イにおいて、実際、宗教と都市国家は混同されている ── 完全な、素晴らしい、またときには危険な仕方において。かかる三つの様相が、私の報告を促すだろう。私は、しかしながら、ギリシア宗教の多様な面の一つがこうして分析の外におかれるだろうことを明確にしたいと思う。アテナイでの宗教は都市国家のそれであった ── エレウシスの礼拝[2]のような、秘儀宗教に対するものを除いて。そこでは、祝祭（la fête）は公共的で、また公認のものであったけれども、礼拝（le culte）は個人的であって、入会を許された人々にとどまり、また秘密であった。後者は市民によるのなく、個人的魂による、神性との間に維持された諸関係に関わっていた。同様に、ディオニューソスは都市国家によって承認された神であったが、しかし非合理的なものと暴力を高揚させるその礼拝の様相は、都市国家の埒外に置かれていた。── それは、都市国家が君臨させた秩序と、少し平衡をとる役割を果たしていた。

そうした様相やそうした傾向にもかかわらず、前五世紀に宗教と都市国家との間になされた同一化は、少なくとも私の知るところでは、ひとがどこにもそれと同等のものを見出さないようなものであった。ここでその観念を与えるには、幾つかの明確化で十分であろう。

一　市民的生活と宗教

用語においては明白な矛盾であるけれども、ひとはギリシアの宗教は世俗的（laïque）であり、またその逆に市民的生活は宗教的であった、ということができる。この表現形式は一つの逆説のようであるが、しかし正確にその領域のユニークな状況を表わしている。

一般にギリシアの宗教は、実際上、教義をもっていなかった。また、それは聖職者ももっていなかった（「世俗的」laïque の語を私が使用するのはそこから来ている）。

明らかに、ギリシア人が信仰する、承認された神々が存在していた。またかれらの歴史上の諸事実を語る、諸々の神話が存在していた。しかし、ポール・ヴェーヌ（Paul Veyne）の［著書の］題名を借りるならば、「ギリシア人はかれらの神話を信じていたのだろうか？」[3]。諸神話は詩人たちによって伝えられたが、か

れらは自由にそれらを手直しし、それらを認めなかったり、それらを補ったりしえた。こうしたことは「聖書」の宗教とは何の関係もない。

そして、とりわけ聖職者が存在しない。ギリシアはあらゆる人類学的叙述に対してと同様、デュメジル（Dumézil）の理論[4]に対する例外をなしている。実を言えば、ひとはよく神官について語る。しかし、この神官は、役割としては聖域を管理することしか有しない。幾人かの神官は伝統的に決まった家系から採用される。だが、このケースは稀である。普通この「神官」は、他の行政官と同様に、選挙されるか抽籤されるかである。かれらはときには神官の会へと集められる。かれらはその管理について報告する。それは他の人々と同様の市民たちであって、特殊ないかなる宗教的権能も、かれらにその役割を準備させることはない。

その印象をゆがめる可能性があるのは、神託（oracles）や占い者（devins）の存在である。前者は全ギリシアを通じて非常によく傾聴された。また、政治はそれを大いに考慮に入れた。それは直接、神の忠告を与えていた。占い者はより一層疑わしいものであった。われわれはホメーロスの時代以来、それから前五世紀の多くの悲劇作品の中で、かれらに出会うだろう。そして、かれらがしばしば耳を傾けられたことを、歴史家たちが確認している。かれらは同様にしばしば、いかさま師で大衆的軽信の悪用者であると批判された。とりわけ、啓蒙され批評的であることを望んだ前五世紀後半においてそうであった。現代世界の予言者はあまり認められていないが、似通った役割をもっている。いずれにせよ、かれらは少しも聖職者をなすものでなかった。ともあれ、それらの存在がわれわれに最初から知らせていることは、アテナイでは、公式の諸儀式のほかに、曖昧な信仰や聖なるもの（le sacré）の前での恐れという、あらゆる隠れた伝統を考慮に入れねばならないだろう、ということである。後ほど、それらのときには恐ろしい出現を見ることにしよう。

しかし、宗教が大筋において、私がその語を使用した意味で、世俗的であるならば、市民的生活は、私が述べたように、宗教的なのである。都市国家はまず第一に、アテーナーによって守護されている。ギリシア人はかれらの都市が神々によって、または神々の援助をえて創設されたことを認めていた。ギリシアの神性・アテーナーは、聖ジュヌヴィエーヴがパリを守護したように、アテ

ナイの守護神であった。そしてかれらは、フランス人がノートルダム寺院でなしているように、守護神に祈り、感謝していた。私はアリストパネスの中に見られる祈りを引用するだろう。──「おお都市国家の守護者・パラスよ。戦争により、詩人たちにより、勢力により、あらゆる国々を越えた、非常に聖なるこの国を支配する神よ。われらのもとに来臨し、あなたとともに遠征や戦闘においてわれらの同盟者たるニーケー・勝利の女神をお連れしたまえ。」(『騎士』581以下)。

しかし、こうした非常に一般的な関係に、もう一つの、一層驚くべき関係が付け加わっており、それはすっかり宗教の浸透した市民的生活の実践そのものに関わっている。そしてこのことは驚かせうるのである。── 普通、ひとは聖権を帯びた一人の主権者をよく知っている。しかし、そのような一つの民主制はどうだろうか？ところが、民主制は古い君主制のすべての聖なるものを保ったのである。そして、公的生活はあらゆる程度でそれに浸透されている。

民会は祈りと供犠によって始まる。民会は法令を採決するが、その幾つかは今日まで保存されている。そして、それは普段は、テオイ（θεόι）またはテオイス（θεοῖζ）[の語で]、すなわち「神々」または「神々のために」で始まっている。それは法廷にとっても同様であり、またディオニューソスの祝祭の一部をなす演劇の競演にとっても同様である。競演は都市国家により、また市民たちの費用で組織される。競演は都市国家全体へ向けられており、観客は前四世紀には、その時間稼げないことの補償として国家の手当金すら受取るだろう。しかし、オーケストラの中央にはディオニューソスの祭壇があるし、またディオニューソスの神官が他のすべての席と区別された名誉席を占めるのである。

しかしながら、この大ディオニュシア祭[5)]の組織は、筆頭アルコーンの職務の一部をなしていた、と言うことができるであろう。彼は選ばれた候補者たちの間から抽籤で決められた九人の執政官の一人であって、かれらは十人の将軍とともに、執行権力を代表している。だから、市民的執政官が宗教的職務をもっているのである。このことは、とりわけアルコーン・バシレウスについて真であり、彼は王の古い宗教的職務を継承していた。

同様に、戦争は軍隊や艦隊のメンバーたちによって執行された、宗教的儀式を伴っている。そして私が引用したいと思うテクストの中で、トゥキュディデ

スは、シシリーを制圧しに向かい、その地で有名な破滅を喫することになる、艦隊の出発を思い起こさせている。──「出航の前の祈りの時間であった。人々は各船毎に分かれてでなく、伝令の声で皆一斉に祈った。すべての軍隊で、人々はクラテール［広口の器］の中で葡萄酒を混ぜていた。兵士たちと指揮官たちは、金杯と銀杯を手にして神酒を注いだ……」。(VI, 32)。

宗教と都市国家の同一化はたいそう緊密なので、壮丁たちの宣誓はかれらに「諸聖域と都市国家」を防衛することを、また「父祖の礼拝」（les cultes ancestraux）に敬意を表すことを誓わせているほどである。財政に至るまで、混同されている。ペリクレスがアテナイの資源を数え上げるとき、彼はアクロポリスの上、［アテーナー］女神の神殿の中に置かれた貯えに言及している。そして、それに次のようなものすら付け加えている。──「公的、私的奉納物の中に現れる未鋳の金銀、それに祭礼の行列や競技に使う聖なる用具、メディア人から獲た戦利品、およびそういった類の他のあらゆる宝物」(II, 13, 4.)[6]。さらにそれ以上である。最初デロス島に置かれた同盟国の宝庫は、その世紀前五世紀の中葉には、アテナイへ、そのアテーナー神殿の中へ移管された[7]。諸国庫のあるものは、他のものへ賦課金を払い、少しそれと混同される傾向があったのだ！

宗教的および市民的という、生活の二つの形態の相互浸透は、だから、あらゆる領域に広がっている。それは一つの領域に属すること、またはもう一つの領域に属することを評価するのを、全くしばしば困難にする。そして、その点でもまた、経験はわれわれのライシテ（laïcité 非宗教性）にまで次の表現のように刻印を残した、と私は思う。──「祖国への聖なる愛……」。われわれにとってすら、なお重なり合いが存在する。ギリシア人においては、その二つの様相は、絶えず分離不可能である。

それらは次のような事情でそれだけ一層そうなのである。── 人類史のいかなる時代でも、神々と人間とはギリシアにおけるほど近くはなかった。ホメーロスにおいて、悲劇において、両者は互いに混ざりあっている。芸術において、両者は非常に近く、神々は人間より少し大きいものとして、全く正しく形に表わされている。ひとはプラトン以前には、真に超越について語ることができない。ところで、プラトンにおいてすら、またプラトン以後、すなわち、われわ

れの近代的諸宗教に近い思考の枠組の中ですら、宗教的なものと政治的なものの関係は、同様に緊密なものにとどまる ── だからといって、本来の意味で宗教的な首長たちが介入することなしに ── ことにひとは気づくだろう。

二　民主制の支えとしての宗教

かくも著しい一致は、前五世紀にその利点を有していた。それはまた、幾つかの難点を有していた。

主要な利点は、全く明らかに、民主制が基礎をおく市民的な価値や義務のあらゆる体系 ── とりわけ法律の尊重 ── を強化することである。

その観念を述べる前に、私は都市国家の規則と宗教の間のきずなをなしている諸要素の一つ ── すなわち宣誓 ── を強調したいと思うだろう。なぜなら、前五世紀のアテナイにおいて、ひとは沢山の場合に宣誓しているからである。われわれは壮丁たちの宣誓を引用した。だが、すべての行政官が就任しようとするとき宣誓している。── 同様に、即刻任命された裁判官は、「現行法にしたがい、かつ人民と五百人評議会の政令にしたがって」表決することを宣誓している（この宣誓はしばしば弁論家によって引用されている）。ひとはそこに、われわれの「陪審員」の起源を見ることができる。ところで、あらゆる宣誓は神々によって保証され、かつ神聖なものと感じられている。われわれはこうした事物の状態の思い出を、証人と同様に司法官もなお聖書にかけて宣誓している国々の中に再び見出す。しかし、アテナイでは ── 少しもはっきり言う必要のないことであるが ── 宣誓はつねに神聖であった、そして違反は神々によって罰せられた。そのうえ、宣誓は数世紀前から、誓いに背く人を追い回して罰する、恐るべき神性として擬人化されていた。[8)]

各人は法律に従って行動しまたは判断することを誓ったので、そこには法律に輝きと力を与える最初の様式があった。

同様に、人々は法律の宗教的性格についての、混乱しているが、根強い観念をいだいていた。 前五世紀にはかれらは法律の相対性を発見していた。だが、多くの人は、法律に霊感を与える正義の配慮は、しかしながら、神々に由来する、という観念を守っていた。それを証明するであろう幾つかの証拠は、次の

ようである。──

ヘラクレイトス、断片114に次のようにある。──「あらゆる人間的規則は神の法によって滋養分を与えられており、前者はいわば後者の現われである」。次に前五世紀にエウリピデスの作品『イオン』(442－443) において。──「人間のために法律を刻んだあなた方（神々)、そのあなた方をひとが法律侵犯のために用いることをどうして認めましようか？」。または『ヒッポリトス』(98) において。──「われわれの法律は、われわれに神々からやって来る」。そしてまた 前四世紀の諸論説において。──『アリストジトンに反対して』(I, 11) に次のようにある。──「あなた方は各々、威厳のある不屈の正義［デイケー］の眼の下にあると思わなければならない。われわれの最も聖なる奥義伝授の啓示者・オルフェウスの言うところでは、正義［の女神］はゼウスの玉座の傍らにあって、人間のあらゆる行為を監視している」[9]。

さらに、アイスキュロスの『エウメニデス』において、アテーナーこそが公的秩序を創始し、国内闘争と同様、専制主義とアナーキーとを同時に禁止しつつ、法廷を創設したものとして表わされていることを忘れないようにしよう。そして、静められたエリニュスたち［復讐女神］は、そのとき、こうして秩序づけられた都市国家の善神、守護神となる。

われわれはさらに前四世紀について、公的職務が宗教とのきずなから引出すあの威厳の、みごとな証拠をもっている。デモステネスに関することであるが、彼は前348年の大ディオニュシア祭のコレーゴス［合唱隊奉仕者］であり、彼の年来の敵・金持のメイディアスによって侮辱されていた。彼は殴打と傷に対する私的訴訟でなく、公的訴訟、すなわち国家に対する過ちと犯罪のために、メイディアスに対して訴訟を起す。彼は次のように述べて都市国家全体が狙われていることを示す。── 彼は公的職務を果たし、その役割のしるしである冠を被っていた。だがその上、かかる公的職務は宗教的であった。それは神のためであった[10]。そしてデモステネスは、かかる行為を不敬虔であると宣言する。涜神は ── 後ほどそれに戻るであろうが ── 公的犯罪であった。これは、デモステネスがそのために都市国家全体を動員しようと欲する理由である。彼は自分の口頭弁論の中で、公的行政官職の尊敬を強調している。だがその背景には、神々の尊敬が存在する。古い要約は涜神を強調しているのである。さらに、論説の結び

の言葉は以下のようである。──「私の述べたすべての理由のために、またとりわけ、彼の涜神によって、その祭りを汚したに違いない、神の気にいるようにするために、投票箱の中に天の正義と人間の正義とが求める票を投じて、彼を罰せよ」(227)。すべては入り混じる。そして、都市国家はその内的秩序を、その神々の庇護の下におく。

このことが規律や、献身、正直、戦闘への熱情、和合にとって役立つだろうこと、それを示すのは容易であろう。── たんなる形式的尊敬であることと、真に感じられていることとを識別するのは困難であろうけれども。

私はむしろ、法律の枠組を越えており、ギリシア人が不文の法律（les lois non écrites）と呼んでいたものに係わる考察を付け加えたいと思うだろう。それは『アンティゴネー』によってよく知られている。それは良心の規則、人間性の規則である。そして、それをときどき侵犯したギリシア人は、にもかかわらず、それを尊重しようとしたことを自慢していた。ところで、それは何を命じていたのか？　死者を埋葬すること、哀願者を、または降服した兵士の命を助けること、また伝令の命を助けること、諸聖域によって提供された避難所を尊重すること……。お分かりのように、かかる人間性の規則は、神的庇護の恩恵に浴する、儀式、人々および場所を尊重することにあった。この最初の万民法は、だから、その本質において宗教的であった。さて、まさしくこの法から、穏和の徳、自制の徳、および人間人格の尊重という徳が由来したのであり、ギリシア人は、アテナイ人を初めとして、前四世紀以来、それらを発達させねばならなかった。ひとはそれに先行したものを言うことができるだろうか？　他者の尊重が神的保証を求めたのか、それとも敬虔心がそれらの徳の促進を鼓吹したのか、を言うことができるだろうか？　私はきっぱりと解決することを引受けないだろうし、そうすることは無謀な選択であろう。反対に、ひとはここでもまた、市民的道徳と敬虔心とが組合わされ、かつ互いを強めあっていたことを知るのである。

このことは若干の省察を思いつかせる。── なぜなら、われわれの民主制と同様、世俗的であることを望んだ民主制における諸価値に対して、もしそうした支えが欠けているならば、それらは明らかに一層もろいものである、と私には思われるから。そのような場合には、その教育の中でこうした諸価値の生き生

きとした伝達に ── テクストや、著者や、かかる特権的な時代の著者との接触によって ── 注意することが、国家にとって義務でなければならないだろう。

私はここでは私のいつもの古典研究擁護の話をしないので御安心ください。しかし、ひとは思想を輝かせている、あの結合に敏感でなくては、ギリシア語のテクストに専念することはできない。それはもちろん、次のような場合である。──『イーリアス』の中で、アキレウスが大声を発するとき、彼の背後にいるアテーナーも同時に叫び、アキレウスの声に超人的な響きを与える[11]。神の声が人間の声にその力を与えている。

いずれにせよ、不文の法律に戻るとして、私はそれが都市国家の内的生活においてすら、一つの役割を果たしたと指摘したい。

実際、ひとはそう信じていた。そして、ひとはそれを侵犯した人々は穢れの痕跡をとどめると信じていた。

ここで、善くても悪くても諸対象にまで係わりえた、聖なるものの観念について語らねばならないだろう。私は「善くても悪くても」と述べたが、その理由は、宗教的に人々に穢れを生じ、かつそのとき浄化を要求するような接触があるからである。こうして、われわれは日常生活の中または公的生活の中に、一層非合理的であるが、同じくらい根強い、宗教的なもののもう一つの現前を見出すだろう。

ひとは、だから、次のように信じていた。── 不文の法律を侵犯した人々は、罪人として穢れており、かつかれらとの接触はその穢れを伝染性のものとする。だから、かれらを避け、かれらを追放しなければならなかった。トゥキュデイデスの最初の数巻はこうして、不文の法律を侵犯したために、一個人によって、またそれゆえに彼の家族によって、感染した穢れから生じた諸困難を思い出させている。それがアルキメオニダイという偉大な家系にとっての事例であって、この家系の一人の者は、祭壇の傍らに避難した謀反人たちの死に責任を負っていた[12]。この冒涜は遠ざけられたが、次にまたやって来た。しかし、疑念は一世紀以上後の、啓蒙の世紀である我がペリクレスの世紀にも生き続けていた！

しかし、このことはすでにわれわれを、あの相互浸透の重大な不都合へと導く。── すなわち、宗教的なものの、政治的争いへの闖入がそれである。なぜなら、宗教的なものは市民的諸価値を強化するが、しかし党派の争いにおける恐

るべき武器になるからである。

三　政争の武器としての宗教

実際、涜神に対する公的告発が存在していた。教義もなく聖職者もいないあの都市に ── ひとは進んで外来の諸礼拝を迎えていたのだから、そこには大きな宗教的自由が行き渡っていた ──、こうした防御が存在しており、その中で聖なるものと政治的なものとは危険に混ざり合っていた。[13)]

古典期アテナイにおいて、かなり名高いそうした幾つかの例が存在した。[14)]

そして、まず最初に、第一の波 ── 識見豊かな人々であるペリクレスの友人たちに対して、新思想に対して、提起された訴訟 ── がある。そうした思想は都市国家のものであるあの道徳の基礎をくつがえすと見なされていた。そのうえ、幾人かの人々はアテナイでは外国人であった。前440年から哲学者アナクサゴラスがこうして起訴された（太陽が火成の物質でしかないと主張したために）。彼は小アジアのクラメゾナイの人であった。彼はアテナイを去らねばならなかった。アスパシアは小アジアのミレトスの人であった。── このペリクレスの愛人はかろうじて救われた。少し遅れてプロタゴラスが同様に起訴された。[15)] お分かりのように、こうしたことはとりわけ政治運動の一部をなしていたし、またさらに、かなり革命的な思想の風潮に対する攻撃であった。

実際、比較しうる他の反動が存在した。メロスのディアゴラスという人は「無神論者」と言われ、宗教を拒否したことで知られていたが、厳粛に刑を宣告された。彼はキケロにもなお知られている。

シシリー遠征のときに、涜神の新たな表明と政治的な新たな訴訟が見られた。ひとは秘儀宗教をパロディ化し、ひとはヘルメス神の小さな立像［ヘルメス列柱］を破損する。── そして告発、密告、判決がある。── その結果、法廷に喚問されたアルキビアーデスは軍隊を去り、敵の陣営に移る。[16)] 都市国家の動揺は、現実の人民の不安を確認している。訴訟による事の成行きや時代の分析は、訴訟の政治的目的への利用を確認している。

そして次に、戦争終了直後には ── 誰でも知っているように ── ソクラテスの訴訟と有罪判決があった。

その場合にもまた、動機は宗教的であること、またはむしろ、同時に宗教的でも市民的でもあることを、ひとは思い起すだろう。ソクラテスは都市国家の神々を神々として認めないことを、また新しい神々を導入することを告発されている。彼は同様に青年たちを堕落させる罪を犯している。もう一度、ひとが知るように、神々が、だから宗教が問題になっているが、都市国家の神々が、だから公民精神が問題になっている。

そこにはスキャンダルがある。そこには宗教的なものの濫用がある。なぜなら、十分確かなことであるが、ペリクレスの友人たちの場合のように、または秘儀宗教の事件の場合のように、告発は一部の人々の、隠然たる不快感に対応していたから。かれらは神の怒りを恐れていた。しかし、同じくそうした他の場合におけるように、政治的事件がそれに混ざっていた。ソクラテスは物騒な弟子たちをかかえており、その中の幾人か（プラトンの親戚）は、寡頭制［の企て[17]］に巻き込まれていた。そのうえ、ソクラテスは進んで民主制の偉大な人々を批判していた。

告発が不正であり、有罪判決がスキャンダラスであったことは、政治と宗教の間の干渉の危険を一層よく明示させるのみである。

しかし、それは、私が実際生活の諸儀式を追うことに専念していたので、本当は語らなかった宗教の一形態が同様に問題になっているということである。だが、それはわれわれが占い者、あるいは穢れの恐怖に関する一節で出会ったことと結びついている。── 神々についてのあの曖昧な恐れが問題であって、それは非合理的な戦慄の中に潜んでいる。この恐れについて前四世紀のギリシア人は、すぐ軽蔑的になっていく一つの語、しまいには迷信に適用されるデイシダイモニア（*δεισιδαιμονία*）を発明した。

ペリクレスは宗教のこれらの形態に対して戦っていたが、それらはつねに再び現われる準備ができていた。

ひとはそれらを悪用することができた。そして情念がそれらに混入した。この点について、ソクラテスの死は、われわれの世界における宗教戦争、原理主義、およびファナティズムの忠告である。

しかしながら、比較自体が幾つかの釈明を促している。それらはギリシアとその寛容の、栄光に属することである。

こうした様々な訴訟があったことは事実である。また、ソクラテスの死があった。しかし、すべてはほとんど信じがたいような自由主義と対照をなしている。アテナイは外来の諸礼拝に開かれていた。[18] アテナイは、演劇の最中にひとが神々を嘲笑することを（アリストパネスにおけるように、なぜなら『蛙』の中でディオニューソス自身、嘲笑されていたから）、またひとが神々は存在しないと主張することを（エウリピデスの幾人かの人物がそうするように）許していた。アテナイはソフィストたちが、人間による神々の発明について大胆なテーゼを発展させるに任せていた。そしてアテナイは、ひとがそれを記憶にとどめているように、聖パウロの時代には「未知の神」（Dieu Inconnu）への礼拝を有していた。アテナイがこの自由主義を犯すに至るためには、激しい国内闘争へ向かわせる、果てしない戦争の困難が必要であった。そして、こうした雰囲気においてすら、ソクラテスの挑発をもってしても、おそらく諸教義について決定を下すのにあまり適格でない数百人の市民からなる民衆陪審団をもってしても、彼はわずかの差でしか有罪にならなかった。それに、彼は国を去ることができただろう……。

だがとりわけ、アテナイと私が挙げたその悲惨な反射運動を非難する前に、次のことを思い起さなければならない。── 悪評は、われわれからやって来たのでなく、アテナイ人自身によってすぐに、われわれがなお読んでいる諸作品の中で、振りかざされたのであった。アテナイの栄光は、直ちにプラトンや、クセノフォンや、他の人々の著作が ── 世界へ向かって投じられた「私は告発する」の形で ── 存在したということである。私の考えでは、こうした義憤の炸裂は、有罪判決の不名誉を訂正するものである。

したがって、ローマの礼拝禁止令や、異端審問所や、古代または近代の宗教戦争をもって見るべきものは何もない。宗教はいつか余分に使われてしまった。しかし、それは、そのときでさえ、すぐに告発され否認されて、臨時の武器にとどまった。

ギリシアの均衡は、政治闘争の激化によってしか破られなかった。そして私は、その影響下ですべてが破滅することを、トゥキュディデスとともに思い起すだろう。だから、真の教訓は市民的秩序についてである。── それは前四世紀が秩序の語とする新語、和合またはオモノイア（*ὁμόνοια*）のうちに要約され

る。

結　び

そうした災難にもかかわらず、経験は美しくかつ希有なるものであった。それは永くは続かなかった。沢山の闘争によって疲れ果てた諸都市国家は、やがてマケドニアの支配下に陥った。それ以前にすでに、諸都市国家は王制を熱望していた。それはイソクラテス、あるいはクセノフォンにおいて感じられる。そしてすでに、ヘレニズム的王制が地平線上に浮び上がっていた。その場合、今度は君主自身が礼拝の対象となり、神または神の賓客と同一視されるだろう。やがて神官たちが増加した。

アテナイ民主制は、われわれを少なくとも一つの思想のイメージの上に委ねる ── そのイメージで私は話を終えるだろう。すなわち、それは人間をすべてのものの中心におくが、しかし人間を一層輝かせる、神的光によって照らされたものとして提示するのである。

注

1）本資料は Jacqueline de Romilly, "Cité et religion dans l'Athènes classique," in: *Revue des Sciences morales et politiques,* 1994, No. 1, pp. 13 – 25. を訳出したものである。 原文にある内容上の区切りに応じて、訳文を節に分けそれぞれに見出しを付した。訳文中の［カッコ］内の言葉は訳者が補ったものである。また、以下の注のうち、末尾に［M. S.］を付すものは訳注であり、それ以外は原注である。

ジャクリーヌ・ド・ロミイの略歴。── 1913年、シャルトル生まれ。エコール・ノルマル・シュペリウール卒。1936年、文学の教授資格。1947年、文学博士。幾つかのリセ、次いでリール大学、ソルボンヌ大学、コレージュ・ド・フランスで、つねにギリシア文学を教えた。1975年から碑文・文芸アカデミー会員、また1989年からアカデミー・フランセーズ会員。外国の十アカデミーの準会員にして、外国の六大学の名誉博士。彼女はギリシア文学（トゥキュディデスや、諸悲劇に関するもの）またはギリシア思想史（「法律」「穏和」「自由」に関するもの、また最近では *Pourquoi la Grèce ?,* 1992, éd. Bernard Fallois.）を対象とする25冊の本を書いた。それに二冊の小説と教育に関する二冊の作品が付け加わる。彼女は1992年に文学研究擁護協会を創設した。2010年、ブーローニュ＝ビャンクールにて死去。

ジャクリーヌ・ド・ロミイの著作の邦訳に『ギリシア文学概説』細井敦子・秋山学訳、法政大学出版局、1998年、および『ホメロス』有田潤訳、白水社、文庫クセジュ、2001年

がある。

2）エレウシスはデーメーテールの密儀の一大中心地。[M. S.]

3）1893年にソーユ（Seuil）社から出版された162頁の作品。

Paul Veyne, *Les Grecs croyaient-ils en leur mythes?* 『ギリシア人は神話を信じたか ── 世界を構成する想像力にかんする試論』大津真作訳、法政大学出版局、1985年。[M. S.]

4）Georges Dumézil, L'idéologie tripartie des Indo-Européens, 1958. 『神々の構造　印欧語族三区分イデオロギー』松村一夫訳、国文社、1987年。[M. S.]

5）都市ディオニュシア祭ともいう。[M. S.]

6）またさらに次のようなものがある。──「それらに彼はなおも他の諸聖域の財産を付け加えていた。」そして、[アテーナー] 女神自身を飾る黄金の覆いを。

7）デロス同盟成立は紀元前 477年、同盟の金庫のアテナイへの移管は前454年のことである。[M. S.]

8）ヘシオドス『仕事と日』219、804。ヘシオドス『神統記』232。

9）また『アリストクラトに反対して』(70) の次の文を参照。──「この法制を設けた人々。かれらが英雄かまたは神々か、誰であったとしても。」

10）[デモステネス『メイディアス弾劾』] 56 参照。──「神に敬意を表して冠を被る者」。

11）『イーリアス』XVIII。 [M. S.]

12）トュキュディデス [『戦史』] I、126。

13）アテナイ人は、とにかく、かれらがスパルタ人に対して非難する誤り ── 諸々の祝祭の厳密な尊重によって政治行動を遅らせること ── を避けていた。

14）この主題に関して次の文献を参照。── E. Derenne, *Les procès d'impiété intentés aux philosophes à Athènes au Ve et au IVe siècles,* Liège-Paris, 1930, à compléler par J. S. Morison, dans *Classical Review,* 35 (1941), p. 5, n.2.

15）プロタゴラスはアテナイを去るとき船が難破して死亡したという。[M. S.]

16）アルキビアーデスの亡命。[M. S.]

17）三十人僭主制のこと。[M. S.]

18）こうして、ヘカテー (Hécate) の礼拝はカリアからやって来た。また、大母神 [キュベレー] (Grande Mère) のそれはフリギアからやって来た。

（本学法学部教授）